



第15回日本緩和医療薬学会年会 メディカルセミナー11

多様化する がんサバイバーシップを 支える服薬の工夫

～緩和ケア外来におけるオキシコドン内服液の使用経験～

開催
日時

2022年5月15日(日)
11:30-12:30

開催
形式

WEB開催(LIVE会場3)

座
長

佐藤 薫 先生
福島県立医科大学医学部
麻酔科学講座 講師

演
者

村上 あきつ 先生
香川大学医学部附属病院
がんセンター 病院助教

令和の始まりとともに、がん治療は新たな時代を迎えている。分子標的薬、免疫療法、がんゲノム診療、さらには緩和医療といった多くの領域で劇的な変革が生まれつつある。緩和医療においては、2018年に改定されたWHOのガイドラインを含め、がん性疼痛治療が大きく変化し、治療におけるオピオイドの役割はこれまで以上に重要な意味を持つようになってきた。

なかでもオキシコドンは世界的に大きなシェアを占め、多くの医療者がオキシコドンをがん性疼痛治療の第一選択としている。徐放性製剤、速放性製剤と様々な剤形が開発されてきたが、オキシコドン速放性製剤の新しい剤形として、新たにオキシコドン内服液[®]が使用可能となった。痛みの治療に関わる中で、内服液の利点を感じる場面は非常に多い。例えば、骨転移の患者は枕元に置いた内服液を起床直後にワンステップで服薬することで、動作に伴う痛みから解放されて一日を始めることができる。嚥下困難を呈している頭頸部がんの患者の、錠剤が喉の奥に留まり続ける、散剤が口の中で広がってしまうなどの問題を、内服液は解決してくれる。

このように疼痛緩和の効果だけでなく、その服用における簡便性や安全性に注目が集まるようになった背景には、がん治療の進歩によるがんサバイバーの増加がある。長期に治療を継続する患者さんが増え、がん治療を生活の一部とすることができるようになってきた。仕事を継続しながら、自身が育児や介護など家庭内での役割を果たしながらなど、がん患者の治療を取り巻く環境は多様化してきた。くわえて、高齢社会においては、高齢患者の服薬管理や嚥下困難などの問題点も加わる。

Patient-Centered Careの点からも、内服液はその服用における簡便性や安全性の点で大きな助けとなると思われる。オキシコドン内服液[®]の成功体験を共有し、疼痛緩和からさらなる緩和医療の進歩につなげてゆきたい。

本セミナーのご聴講は、第15回日本緩和医療薬学会年会への参加登録が必要となります。
詳細は、年会ホームページ(<http://www.congre.co.jp/kanwa15/>)をご確認ください。



共催：第15回日本緩和医療薬学会年会/日本臓器製薬